

平成14年度 文化政策学部長特別研究費 研究成果報告書

研究テーマ：環境移行時の心理的適応過程に及ぼす対人関係の影響に関する縦断的検討

研究者氏名：文化政策学部 文化政策学科 講師 福岡欣治

注) 本研究の調査データにもとづき、主として心理学的観点から分析した結果を、日本応用心理学会第70回大会において報告した。以下はその内容を加筆修正したものである。

大学新入生のソーシャル・サポートと心理的適応 —自己充實的達成動機の媒介的影響—

問題と目的

大学生にとって、親からの心理的離乳、自我同一性の確立という発達課題に取り組みつつ、大学という新たな環境に適応し学業生活に積極的に関与していくことは、決して容易なことではない。そもそも大学生活への適応は古くて新しい問題であり、近年は深刻な精神障害としてのアパシーは少ないものの、軽い抑うつ症状を伴う意欲低下の問題は現在も看過し得ない。他方、ストレス対処や心理的適応に及ぼす支持的な対人関係の役割は、社会心理学において近年広く認識されるようになってきた。このような背景をふまえると、大学新入生における環境移行への心理的適応過程をとりあげ、それを支持的な対人関係の視点から検討得ることは有用であり、また重要なことと考えられる。

すでに福岡(2000)は、入学約6ヶ月時点での大学新入生を対象に家族および友人のソーシャル・サポートと無気力傾向の関係を調べ、主として友人のサポートが自己充實的な達成動機を高めることで学業および大学生活全般についての意欲低下を防ぐ効果をもつことを示唆する結果を得ている。

そこで本研究では、以下の3点から福岡(2000)の知見を確証し発展させることを目的とした。

- (1)人口統計学的属性および志望順位など、受験関連の変数を統制する。
- (2)入学後約3ヶ月および9ヶ月時点で調査を実施し、結果の一般化可能性を高める。
- (3)大学生活への適応のみならず、精神的健康度も測定する。

調査1(入学後約3ヶ月時点)

方 法

被調査者 静岡県内の3大学(4年制1、短大2)における新入生計247人(男25人、女222人)を対象に調査をおこなった。解答者の年齢の範囲は18-33歳(M=18.66、SD=1.90)であり、そのうち自宅通学者が81.8%であった。

調査内容 ①ソーシャル・サポート：福岡(2000, 2002)をふまえて構成した。家族と友人について各10項目(「あなたの気分をなごませたり、くつろがせてく

れる」「あなたがふだんやらなくてはならない用事を手伝ってくれる」など)で、自分を支えてくれる人がいるかどうかを回答させた。友人については、大学入学後の現時点における友人関係を想定するよう指示した。回答は各項目につき4件法(1.全然いない～4.確かにいる)とした。なお、 α 係数は0.80以上であり、家族サポートと友人サポートの尺度間相関は $r=.40$ であった。

②達成動機：堀野・森(1991)の尺度を使用した。競争的達成動機(10項目；「競争相手に負けるのはくやしい」など)と自己充實的達成動機(14項目；「何でも手がけたことには最善をつくしたい」など)の2側面からなる。回答は原版と同じく7件法(1.全然あてはまらない～7.非常によくあてはまる)とした。 α 係数は0.80以上であり、競争的達成動機と自己充實的達成動機の尺度間相関は $r=.24$ であった。

③心理的適応：下山(1995)による意欲低下領域尺度と精神健康調査票GHQの12項目版を使用した。前者は「学業」「授業」「大学生生活」の3領域・各5項目からなる。回答は原版と同じく5件法(1.全くあてはまらない～5.大変あてはまる)とした。各尺度の α 係数は0.63～0.73の範囲内であり、尺度間相関は $r=.19$ ～.48であった。GHQ 12項目版については、4件法の回答をいわゆるGHQ方式(0-0-1-1)で得点化して合計点を求めた。高得点ほど精神的に不健康であることを意味する。 α 係数は0.75であった。

④人口統計学的属性および受験に関する要因：年齢、性別、通学形態(自宅、自宅外)、志望順位、現役合格か否か等についてたずねた。

実施方法 授業中に調査票を配布して協力を求め、約2週間以内に提出させた。調査時期は2002年7月上旬～中旬であった。

結果

最初に、年齢・性別・通学形態、志望順位、現役合格か否か、および調査実施大学がそれぞれ測定変数の一部と関連することを確認した。そして、これらをすべて(適宜ダミー変数化して)統制し、サポート・達成動機・心理的適応の偏相関係数を算出した。その結果、家族と友人のサポートはともに自己充實的達成動機および心理的適応の指標と有意な関連があり、また自己充實的達成動機は学業および大学生活全般の意欲低下と有意な関連を示した(Table1)。

Table 1 調査1における変数間の関連性(偏相関係数)

測定変数	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦
①サポート:家族							
②サポート:友人	0.37						
③達成動機:自己充實的	0.17	0.27					
④達成動機:競争的	0.01	0.03	0.26				
⑤意欲低下:学業	-0.13	-0.14	-0.39	-0.08			
⑥意欲低下:授業	-0.18	-0.06	-0.06	-0.02	0.27		
⑦意欲低下:大学生活	-0.14	-0.30	-0.29	-0.03	0.46	0.17	
⑧精神的健康度	-0.20	-0.20	-0.01	0.09	0.22	0.15	0.40

注:網掛けは相関係数が有意であることを示す。

これらの結果をふまえ、福岡（2000）と同じく「家族と友人のソーシャル・サポートが達成動機を高め、それらが心理的適応に影響する」という仮説的な因果モデルを構成したパス解析をおこなった。その結果を Figure 1 に示す。図から明らかのように、友人のサポートが自己充實的達成動機を高めることで学業および大学生活全般の意欲低下を防ぐことを示すパスが有意であった。また精神的健康度には家族と友人の両サポートからの直接のパスが有意であった。さらに友人サポートから大学生活全般への意欲、家族サポートから授業への意欲に対するパスも有意であった。

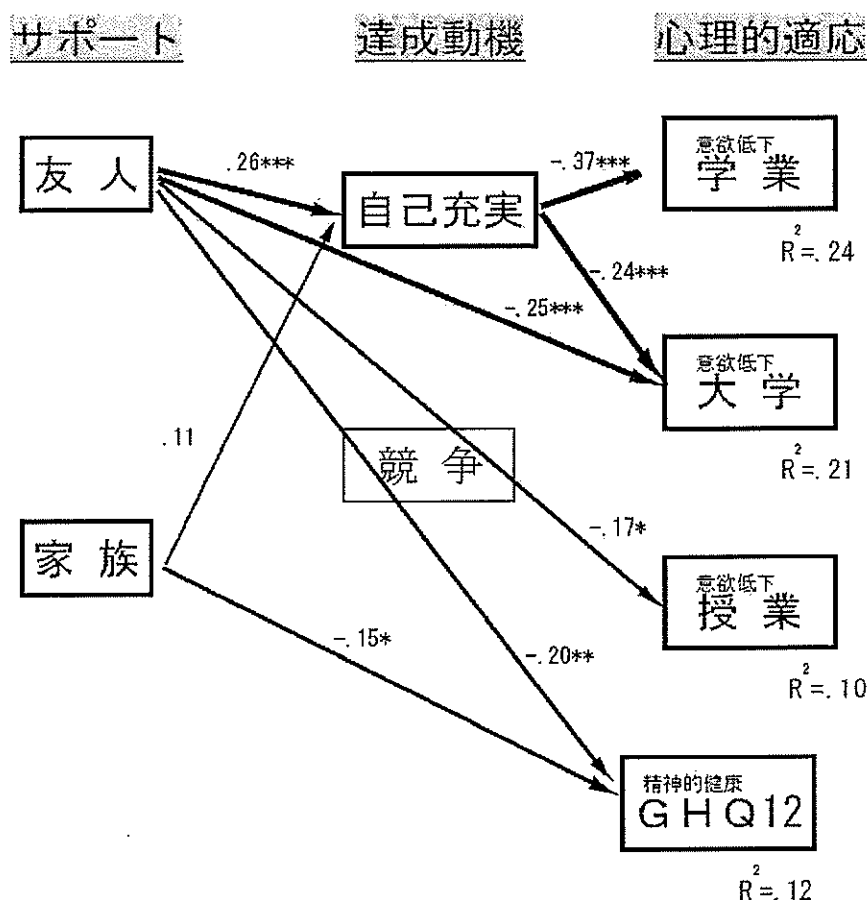


Figure 1 調査1における変数間の関連性（パス図）

注：絶対値が0.10以上のパス係数のみを記載。同順位の変数間の係数は省略。

注：*** $p < .001$ ** $p < .01$ * $p < .05$

相関分析およびパス解析の結果は、大学入学後の友人関係におけるソーシャル・サポートが自己充實的な達成動機の維持向上に寄与し、心理的適応にもつながることを示している。また、家族のサポートも、大学生活における意欲との直接の関連はないものの、精神的健康の維持とは関連していると言える。

調査2（入学後約9ヶ月時点）

方法

調査1の回答者に対し、翌年1月中旬～下旬にかけて、再度ほぼ同内容の調査票に回答を求めた（ただし「受験に関わる要因」は除く）。有効回答者数は127人（男9人、女118人）であった。なお、調査1のみの回答者と両調査の回答者で調査1の各変数の平均値を比較したところ、「授業に対する意欲低下」のみ有意差があり、両調査の回答者の方が意欲が高かった。他の変数については有意差はみられなかった。

結果

最初に調査1と同じ変数を統制して、調査2における変数間の偏相関係数を算出した。その結果、調査1で見出された結果をほぼ完全に再現した（Table 2）。パス解析の結果も同様であった。

Table 2 調査2における変数間の関連性（偏相関係数）

測定変数	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦
①サポート:家族							
②サポート:友人	0.60						
③達成動機:自己充實的	0.24	0.30					
④達成動機:競争的	0.07	0.07	0.30				
⑤意欲低下:学業	-0.10	-0.09	-0.42	-0.06			
⑥意欲低下:授業	-0.16	-0.07	-0.27	-0.02	0.27		
⑦意欲低下:大学生活	-0.26	-0.31	-0.36	-0.02	0.45	0.30	
⑧精神的健康度	-0.22	-0.23	-0.09	0.04	0.07	0.20	0.21

注:網掛けは相関係数が有意であることを示す。

次に、調査1の測定変数をすべて統制した上で、同様の分析をおこなった。その結果、ソーシャル・サポートから心理的適応への直接のパスは有意ではなかったが、友人のソーシャル・サポートが自己充實的達成動機を高めることで学業および大学生活全般の意欲低下を防ぐことを示すパスは、なおも有意であった。加えて、自己充實的達成動機は精神的健康度とも関連していた。

これらの結果は、友人サポートと自己充實的達成動機が結びつき、そして心理的な適応を維持向上させることを改めて示唆するものといえる。

結語

本研究の結果は、主として友人のサポートが自己充實的な達成動機を高めることで大学新生の学業および大学生活全般についての意欲低下を防ぐ効果をもつこと、また家族および友人のサポートが精神的健康を支える効果をもつことを示す。福岡（2000）の結果を確証・発展させるものといえる。

ただし、調査2の分析対象者に偏りが見られる点は、結果の一般性を若干損なうものであり、検討の余地が残されている。

引用文献

- 福岡欣治 2000 大学生における家族および友人の知覚されたソーシャル・サポートと無気力傾向—達成動機を媒介要因とした検討— 静岡県立大学短期大学部研究紀要, **14-3**, 2-1-2-10.
- 福岡欣治 2002 日常ストレス状況での友人との支持的相互作用と気分状態(2) 日本心理学会第66回大会発表論文集, 871.
- 堀野 緑・森 和代 1991 抑うつとソーシャルサポートとの関連に介在する達成動機の要因 教育心理学研究, **39**, 308-315.
- 下山晴彦 1995 男子大学生の無気力の研究 教育心理学研究, **43**, 145-155.
- 鉄島清毅 1993 大学生のアパシー傾向に関する研究—関連する諸要因の検討— 教育心理学研究, **41**, 200-208.

謝 辞

調査にご協力くださった各大学の先生方、ならびに学生の皆様に、深く感謝いたします。

以上